

第12回 農業情報ネットワーク 全国大会開催



25日夜に開かれたネットワーク交流会。IT関係者が顔を揃え、活発な意見交換がなされた

さる11月25、26日、茨城県つくば市にて第12回農業情報ネットワーク全国大会が開催された。「21世紀への進化」「IT革命と農業のパラダイムシフトを手の届く技術で」というテーマのもと、IT農業の実現に向けた情報システムの解説や、動き始めたIT農業への試みについて語るアグリビジネス再生セミナー、農業情報活用セミナーなど、数多くの催しが行われ、活発な交流・意見交換がなされた。

農業情報利用研究会が主催するこの大会も、今回で12回目を迎えた。

基調講演では日本総合研究所の三和政昭氏が、情報化社会とはなにか、情報化社会に対する日本人のネットワークと可能性はどこにあるのかを、これまでの日本の成長を支えてきた農耕社会と情報化社会の相違点を通じて検証した。三和氏はこの情報化社会において必要とされるのは「最先端の技術ではなく、思想を理解することであると指摘し、そして日本型のITとは、急速に普及しつつあるiモードや、日本ならではのコンビニエンスストアによるB to B to C型のeビジネス、そしてFAXなどの家電の進化によって完成していくだろうとの予言をもって講演をしめくくった。

会場の各所では、各メーカーの担当者が、将来のIT農業を見据えた商品やシステム、サービス等の紹介と言う形で各社のIT農業への取り組みや現状、将来について語るIT農業講座

・生鮮ビジネスのトップ経営者を講師として招き、各社のIT化への取組み、方向性についての報告や提言を通して21世紀のIT化生鮮システム、新しい農産品流通システムの基本型を探るアグリビジネス再生セミナーなどのセミナーから、

・21世紀の農業・農村・食料にかかわるIT革命の方向について論じるIT農業徹底討論

・将来に向けた食のありかたを、見学者と共に論じ、考える食のバトルトークといったシンポジウムなど、数多くの催しを通じて新たな情報化農業ビジョンの提言がなされた。

農業情報技術展

同時開催された農業情報技術展では、協賛各社のシステムの展示・実演が行われた。個々の農家というより、JAなどの団体・組織、あるいは関係企業を対象とした催しであるため、この場において紹介された資料の半数は、個々の農家が直接購入を考えるようなものではなかったが、IT分野の大手企業も参加し、IT業界の持つ農業への関心の深さを見て取ることができた。

北原電牧(株)のブース

iモード機能を利用し、携帯電話を通じて自宅のパソコンと牛舎を直結。飼養管理プログラムの最新繁殖予定の確認や、逆に携帯電話からの飼養管理プログラムへのデータ入力を可能とした酪農支援ソフト「iモードふりーすらんど」をはじめとする「ふりーすらんど」シリーズを展示。同時に紹介された、乾草以外のすべての飼料の給餌作業を自動化する荒飼料配合自動給餌機「マックスフィーダー」との連携により、酪農の給餌作業の大幅な省力化と情報化を実現する。重大な労力を要する個人酪農の新たなありかたを提案した。



ソリマチ(株)のブース

モデル水田の栽培管理情報を採取し、広く農家に配信することで栽培技術の共有化・標準化を実現する「広域水田水管理モニタリングシステム」、農地情報を地図情報という形で視覚化して管理できる「営農情報支援システム」といった法人・会議所向けのシステムから、農家がパソコンで使える「農業経営簿記」「農作業日誌」といったパッケージソフトまで、幅広いニーズに応じた製品を展示。また、ソフトをうまく使いこなすための解説本に力を入れているのもこの会社の大きな特徴である。

(株)NTTデータのブース

市況・生産・消費情報等の生鮮食料品情報をiモード携帯電話などで受信できる「生鮮食料品関連情報提供システム」、植物の種類・品種の分類や病害虫の被害の把握ができる高分解能衛星画像を提供する「Geoコンテンツサービス」などを出展。